

古希を迎えて

いつもの誕生日は、また歳を1年重ねたかという感じで、あまり感慨にふけることもない。でも今年の誕生日は、「古希（古稀）」を迎えたこともあり、すこしは感慨にふけりたくなった。ネットで調べてみると、古希とは「中国の唐の詩人、杜甫の詩の一節である人生七十古来稀なり」に由来しているという。

「人生七十」は、私にとっても稀なことである。日本が無謀な侵略戦争に負け、それから3年後に、私はこの世に生を受けた。生まれた時から病弱で、医者からこの子は10歳まで生きられるかと言われたようだ。私には、そんな記憶はないが。

「古希」を記念して、わが歩みを振り返りたい。レポートでは、懐かしき写真を順に掲載していく。

病弱と引っ越しの繰り返しで、手元にある幼き頃の写真はあまりない。最初の写真は、名古屋市千種区千種本町「鉄道官舎」広場で撮った笑顔。何歳の時か不明だが、だんだん成長してきたころだ。とにかく頭と顔が大きかった。よく「頭でっかち」だと言われた記憶がある。

中学1年のとき名古屋から高山へ、高校1年のときた高山から郡上に転校。そして信州松本で大学生活を送り、大阪で2年の浪人の末、大学院に入った。

なんとか名古屋市立女子短大に就職でき、大学教員としてスタートを切った。写真のように1985年には東京で開催された国際シンポジウムで報告した。キンチョーの春だった。10数年にわたる短大教員生活を経て、名古屋市立大学の教員となり、多くの学生らと調査などを行い、学部長・研究科長などもつとめた。

2014年2月22日午後2時から、滝子キャンパス1号館201教室で「最終講義」を行った。大きな教室一杯の卒業生・在学生、教職員、そして市民の方たちの前で、35年の教員生活を振り返った。退職してから、すでに4年半近くが過ぎた。この間、若い同僚が亡くなるなど、悲しいことも多かったが、生活にリズムをつけて元気に暮らしている。昨年12月には、名古屋から大阪に転居した。久しぶりの「大阪暮らし」にも慣れ、図書館に通い、こうしてレポートを書きつづけている。

さいごの写真は、愛知県刈谷市で開催された「第13回障害児の高校進学を実現する全国交流集会 in あいち」で司会をつとめ、昨日16日の全体集会での集会まとめ報告。なんだか私の「古希」を記念するかのようであった。こうして70年のわが人生を振り返ると、一本の線で結ばれているかのようだ。これからも元気に発信していきたい。

(2018年9月17日)

